

地域と協同の研究センターNEWS

2024年12月25日発行

研究センター創立30周年記念特集④

変わらず、変えていく、九鬼産業

地域と協同の研究センター「30周年記念特集」の4回目として、この12月に研究センター理事の田辺準也さん、専務理事の駒井義明さんとともに、九鬼産業株式会社を訪問しました。

九鬼産業株式会社は、1886(明治19)年創業のごまの総合メーカーです。安全性、おいしさ、高品質を追求、環境への配慮をモットーに「こころ、ひと粒一粒。」、ごまと共に一世紀以上、食にこだわり、安全で高品質な商品を提供し、食卓に喜びと健康をお届けしています。



九鬼産業の顧問、九鬼紋七さんには2016年度より研究センター理事を務めていただいており、東海交流フォーラムなどでファシリテーターをお願いしたり、生協職員マイスターコースで「ものづくりの思いやこだわり」についての講義をお願いしたりしています。当日は、本社工場、ボトリングプラントなどを見学させていただいた後、かつて偉人たちがつどい、思いを巡らせ近代産業発祥の拠点であった歴史的建造物の伝七邸で九鬼さん、田辺さんの対談を行いました。九鬼さんは伝七邸の維持に尽力されてもいます。以下、工場での説明と、対談の概要を紹介します。工場長の林義晃さんはじめ多くの職員のみなさんにお世話になりました。あたたかい対応に感謝いたします。

工場見学

工場は、6S(「清掃、清潔、整理、整頓、しつけ、習慣」の頭文字からつくれられた行動規範)活動が徹底され、各部署で働くみなさんの顔写真入りのメッセージボードが貼られていました。それぞれの工程を、そこで働く方々に丁寧にご案内いただきました。原材料の管理から、ボトリング、梱包に至るまで、かかわる方々の心のこもった製造工程をつぶさに見学させていただき、たいへん感動しました。最新の工場設備に伝統が融合し、九鬼産業の経営理念を肌で感じることができました。

ごまづくりへのこだわり

九鬼産業のこだわりは、伝統の製法、圧搾法など昔ながらの製法を大事にし、ごま本来の味わいを活かし、ごまの香味や旨みを引き出すことにあります。ごまの皮を剥く際は、長年培った経験が何よりも大事だと考え、化学薬品は使わず、物理的な方法でごまの皮をていねいに剥いています。また安全性を追求し、製品化の工程で残留農薬検査や細菌検査など厳しい検査を重ねています。国内で流通しているごまは99%以上海外から輸入されたものであるので、品質管理を徹底しています。日々進化、新しいものを取り入れ、品質管理のレベルアップを図っています。

国産ゴマとフェアトレード

「三重県ゴマ産地化プロジェクト」に取り組み、国産ゴマの栽培の輪を広げようとしています。農副連携にも取り組み、生産実績は全国2位となりました。2017年に、ものづくりの思いを語る会で、竹成工場(ねりごま製造)、マニュアーワーク場(肥料製造)、そして、ごまの圃場を見学させていただきました。国産ゴマの栽培はその後も努力が続けられています。今後は、三重県産ゴマ100%の商品を目指していることです。環境への配慮として、ごまを循環させる取り組みも続けています。

国内ごまメーカーで初めてフェアトレード認証を取得したいりごまは、ニカラグアのデル・カンポ農協との連携で生まれました。小中学校での講演、食育、啓発活動にも取り組んでいます。【2ページにつづく】

地域と協同の研究センター 12月の活動

1日(日)	三河地域懇談会「コープ安城よこやまへ寄らまいかん」	14日(土)	「ぞう列車がやってきた」(合唱と創作講談・平和企画)
2日(月)	尾張地域懇談会	15日(日)	難民食料支援仕分け発送
3日(火)	名城大学人間学部「ボランティア入門」12回	17日(火)	名城大学人間学部「ボランティア入門」14回
5日(木)	協同組合等研究組織交流会(名古屋開催)	19日(木)	三河地域懇談会世話人会
7日(土)	第21回東海交流フォーラム第4回実行委員会、第3回理事会	20日(金)	尾張地域懇談会
10日(火)	研究フォーラム地域福祉をささえる市民協同 名城大学人間学部「ボランティア入門」13回、地域福祉フォーラム	22日(日)	多文化社会と協同組合懇談会
12日(木)	協同の未来塾⑥	23日(月)	ウクライナ避難民支援情報共有会議
		24日(火)	名城大学人間学部「ボランティア入門」15回
目次	変わらず、変えていく、九鬼産業 チチフォーラム IN 岐阜 「ぞう列車がやってきた」がやってきた！	1 3 4	難民・避難民、そして外国人就労のための課題 情報クリップ 書籍紹介「子どもの学習支援」ハンドブック
			5 6 8

【1ページからつづく】

新たな挑戦

新たな挑戦として、「ヘルシーセサミパウダー」を開発しました。国内だけでなく、海外でも特許をとっています。「黒ごまラテ」も好評です。竹成第2工場も新設しました。

ハラル認証、コーチャ認証の取得もし、ごまの可能性を信じ、よりよい商品をお客様に届けたいと思っています。ごま市場の規模は拡大し、ごまの人気は衰えがありません。未来のために更なる新しい価値を追求し続けます。



ごまの歴史

田辺：ごまは世界から来ているということが、工場見学でよくわかりました。ごまの歴史を聞かせてもらいますか。

九鬼：ごまは、大化の革新のころの記述にもあります。お米の代わりに年貢として出したそうです。ごまを搾って油にすることは、貴族の方々が灯りをとるためにしていたそうです。江戸時代になると、いろいろなお菓子にゴマを使うようになりました。明治直前には、いろいろ屋台で油を食するようになったのが、南蛮漬けです。そこから一般の方が食するようになったそうです。「開けゴマ」はアラビアンナイトで出てくる言葉です。紀元前、アフリカのサバンナで生まれたごまは、エジプトでミイラに使ったそうです。酸化、劣化しにくいので、女性たちがお肌に使うようになりました。

ごまの食べ方

田辺：最初のころはどうやって食べていたのですか。

九鬼：焙烙でちょっとつぶしたひねりごまは、香りがよいですね。そんな食べ方から始まったようです。胡麻和えは、あたり鉢ですりつぶすのですが、手間がかかるので、メーカーが、ねりごまもつくるようになりました。九鬼産業がそれを始めたのは、昭和60年ごろです。工場も胡麻の香りがふうんとするところとしないところもあります。火を入れて、焙煎すると匂いが立ちます。

ごまは油にしても、そのまま食べても、ペーストにしてもいい。栄養価も高く、劣化防止、抗酸化作用もあります。カロリーが高いため、適度に摂ってもらえばいいと思います。



変えてはならないこと

田辺：変えてはならないことは、何だとお考えですか。

九鬼：油は圧搾法ということに尽きます。変わることは、瓶詰め、包装などの部分です。ボトリングはどんどん機械化しています。

田辺：工場見学で印象的だったのは、ほとんど機械化されていることでした。でも、検査は最後は人の目だと聞きました。機械の限界もあるが、人が最終的に大事にされていることがよいと思いました。何か考えがあるのか。そうせざるを得ないのか。聞きたい。



九鬼：食べるのは人なので、人の目を介することが大事だと考えています。機械では限度があります。というのは、機械は教えられたことはやるが、教えられないものはやれない。最後は人の目を通すことが確かなことです。機械を使っているのは、異物をチェックして、ごま以外の物質をはじくことです。

田辺：発想として大事なことですね。機械ができるることは山ほどあるが、違った角度から、分析する以前の総合的な能力は人間にしかない。そういうあたりを大事にすることが素晴らしいと思います。会社経営全体がそういう考えですすめられているかが大きい。職員のみなさんの対応も、見学のルートの中でああいう対応をしていただいていることに感激します。



九鬼：見学のみなさんに、各部署で説明するのは、社員教育になっています。どう説明するか考えるし、パネルをつくって工夫をします。自分の部署をあらためて見つめたときに気づきもあります。

田辺：工場見学の受け入れも整備されているので、生協組合員が見学させていただく機会が増えるといいと思います。商品の学習・交流がすすむことを願っています。

その他、研究センターの中期計画や、理事会の運営についてもさまざまな貴重なお話がありましたが、このニュースでは、九鬼産業のごまづくりへのこだわりに焦点を絞って紹介させていただきました。

(編集・文責：伊藤小友美)

**地域と協同の研究センター 岐阜地域懇談会主催
「少しでも愉快に年をとるために必要なことを考えあおう」**

「チラシ」2024年10月19日

2月24日（土）『協同が生まれるまちづくり』をテーマに第20回の東海交流フォーラムがおこなわれました。午前の「協同の力とは」を考えあうテーマ別分散会では、「地域（共生）を作ってきた力を探る」—各務原八木山地区のささえあい活動に参画する男性住民の取り組みや思いを聞きました。いきいきと活動される男性たちの姿を「コーポぎふのみなさんにぜひ聞いてほしい！！」との思いから、コロナ禍で中断していたチラシを開催することにしました。東海交流フォーラムでは男性でしたが、今回は女性の方にも報告をお願いしました。13名の方に来ていただきました。テーマは「少しでも愉快に年をとるために必要なことを考えあおう」になりました。ささえあい活動が、助けられる側の困りごとが解決できてありがたいだけではなく、助ける側の、満足・生きる力につながっていること、それを「愉快に年をとる・・・」という言葉にこめました。

八木山地区社協の事務局清水孝子さんの、テンポの良い司会によって、つぎつぎと、それぞれの方が、報告されました。まずささえあい活動のはじまったきっかけは、八木山地区は50年ほど前高度経済成長を背景に里山を造成して誕生した一戸建て団地。子どもたちは巣立ち、7000人ほどもあった人口もいまや4664人に減少。坂の多い町で高齢者にとって住みにくい環境。元気なうちに平らな町に引っ越す人が続出して・・・。「これは大問題、この土地を終の棲家にしたい」そう考えたみなさんが動き始め、「飲み会！」や、さまざまな会議を経て、2014年1月に「ささえあいの家」を拠点にした活動が始まりました。終の棲家にするなら困りごとができるにちがいない、「生活支援ボランティア活動をしようよ」ということで始めました。1番多く注文があったのは、庭の草取りでしたが、私たちは草取りを始めてすぐにハッピーアクションです。「私は支援する人、依頼した人は支援される人」って、これって違うよね。「支援するという私たちも得るものがある、これってささえあい活動だよね」と、みんなで話し合って名称を「ささえあい活動」としました。最初、男性陣はささえあいの家の営繕をしていましたが、約一年経って、家の修繕は終わったけれどみんなは勢い余って地域に出て、少しずつ地域のみなさんの営繕的な事をやっていこうと始めました。それが今の活動の男性陣が地域に打って出るきっかけになったと思います。

ささえあい活動の内容は多岐にわたります。ささえあい活動でのエピソード・・・一時間の家事支援が終わるころ、コーヒーを用意して待っていてくださる依頼者さん、あれこれの話で、一時間話して、その時間が楽しい。認知症の男性が、一人で将棋の駒を並べていて、「だれか相手をする人はいないか?」ということで将棋ボランティアの登録をしてある人に行ってもらいました。すぐ彼は喜んで、「もっと、もっと」とゲームを楽しみました。重い認知症の人も、昔覚えた将棋はできるという事実を私たちは学びました。魔法使いのような作業をして、サッシの部品の交換をされたり、カラオケが大好きだけれど、脳出血のために、できなくなった方のために、福祉車両を使って週一回カラオケに送迎して、大変喜ばれています。ささえあい畠で収穫された野菜を調理して配食、ささえあいの家の作って食べよう活動、いろいろな場面で、なやみごとを聞くのもささえあい活動です。そのささえあい畠で、水やりが大変な作業だったのですが、高低差を利用した自動散水装置を作ることによって解消されました。かつての職場での経験を活かしてできることです。入院されて留守になった家の見守りを3ヶ月続けられたり、洗濯ものが干せない方のために、毎日干して取り込んで畳んでという家事に通っておられたり、八木山を運行するバスの時刻表を見やすい表にして配布したり、ささえあい活動は、くらしの隅々に浸透しています。そして、報告される方は皆さんから、「仲間がいて、この活動ができる喜び、八木山でくらす幸せ」が伝わってきました。清水さんは「何度も聞いたという方もおられるかと思いますが・・・」と言われましたが、何度も聞いて、また聞きたい内容でした。会場からは、自分の地域でも何かしたい、コーポぎふとかかわりが持てるといいとの発言がありました。

【感想】

ちょっとした困りごとでも帰省を兼ねて主人は（息子）は車を走らせて向かいます。「遠くの息子より近くの信頼できる人」に頼ってもらえるような組織がどこにいてもできるとよいと思います。「そのためには何ができるのか？」これは私自身の問題です。みなさんの姿が、好きなこと→生きがい→毎日を幸せに感じる→「いい人生だったねえ」→と最期を迎える生き方に希望を持てました

(いかい じゅんこ)

「ぞう列車がやってきた」がやってきた！ in コープあいち生協生活文化会館

2024年12月14日(土)にコープあいち生協生活文化会館にて、「ぞう列車がやってきた」というテーマで、名古屋を舞台にした平和の象徴の実話物語を合唱と創作講談で開催しました。コープあいちや地域と協同の研究センターが参加する「くらしと平和・憲法を守る実行委員会」とコープあいちOB九条の会が主催しています。およそ、100人の老若男女が集まり、平和を願いつつ、楽しみました。

開会あいさつの愛知県原水爆被災者の会副理事長 丹羽洋子さん



日本被団協としてノーベル平和賞を受賞。理事長は昨夜ノルウェーから帰ってきたばかりで、代理でごあいさつします。ノーベル委員会が受賞理由を述べていて、80年近く戦争で核兵器が使用されてこなかった、被爆者の代表者による並外れた努力は核のタブーの確立に大きく貢献したと。愛知県55の自治体を訪問し被爆者体験を語ってきた。自治体もおめでとうございます、と対応してくれました。来年被爆80年、戦後80年であり、様々なに事業を計画しており、愛友会へのさらなるご支援をお願いしたいと思います。

合唱ぞう列車がやってきたを作曲指揮される藤村記一郎さんと、創作講談の旭堂鱗林さんとで、掛け合いのように内容の紹介をいただきました



3年前に杉原千畝物語でこの場所で講談をしたという講談師の旭堂さん、大須演芸場でも大活躍されています。旭堂さんの紹介で、藤村さんからは東山動物園での像の物語を知つてもらいたいと歌を作った、でも、まだ知らない人がたくさんいる、「なごやん」でも知らない人がいる、本物のぞう列車が走って75年、名古屋のメンバーと一緒に合唱したい話されました。

作曲・指揮は藤村記一郎さん、ピアノは夏目順子さん、園長役は、子どものころに合唱に参加して今は親子で参加している方と紹介され、楽しい合唱がされました



戦争中全国の動物園に国や軍から猛獣の殺処分命令が出される中、名古屋の東山動物園の園長はそれにあがらい、2頭の像が生き残る。戦後唯一となったぞうを見たいと、当時の国鉄が全国から東山動物園のある名古屋に走らせた、感動の物語を合唱しています。

創作講談「ぞうれっしゃ」を今日はじめておめみえと いう旭堂鱗林さん。大笑いの中に、平和の大切さが 伝わるものでした



主催者を代表して、コープあいち箕浦統括理事から閉会挨拶

来年は被爆80年、戦後80年となり、その中で、2月14日には名古屋市の公会堂で、被爆ピアノコンサートがあり、

平和への思いを盛りあげていきたいと話されました。

※参加したみなさんからも、感動した、良かったと声が寄せられました



↑フルバージョンの動画をお楽しみください

12月15日(日)には、難民食料支援・仕分け発送作業を、 難民のみなさんも参加して行いました

食料や現金の支援をしていただきありがとうございました。約40名のみなさんが参加して12世帯、27箱を発送できました。冒頭、お米を30袋寄付していただいたJAひまわり組合長今泉さんのメッセージ動画を見てもらい、難民や支援のみなさんにあたたかい気持ちを共有できました。



↑JAひまわり今泉組合長のメッセージ

(文責:事務局)

難民・避難民、そして外国人就労のための課題

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

出入国管理庁によると、ウクライナ避難民入国者数は11月30日現在2,731人、この1ヶ月で13人の避難民の入国がありました。在留者数は1,980人です。入国時に身元保証人のいない避難民は391人、男女別では男性が797人、女性が1,934人、年代別では18歳未満が418人、18歳以上61歳未満が1,942人、61歳以上が371人です。東海地域では、愛知県は117人へと増加、岐阜県は10人と2人減少、三重県は1人と変化はありません。東京は623人、大阪は14人減少しています。

日本政府は、身元引受人のいないウクライナ避難民への生活費を日額2,400円、支援開始から2年間支給してきました。身元引受人がいる避難民に100万円/年、日本財団は3年間の支援（渡航費、生活費、住居関係整備費）を行ってきました。現在、これらの支援が終了しつつあり、それに伴った避難民の方達の就労や生活困窮に関する相談が増えていると感じています。ウクライナ避難民には、これまで日本に避難してくる難民にはなされてこなかった支援が初めて行われました。経済的支援、住居支援、就労支援、日本語学習支援など、多くの素晴らしい支援が、政府、民間、市民により迅速に用意されました。それでも国を超えて強制移住をせざるを得なかつた人たちの生活を、新たな地で再建するのには全く十分ではありませんでした。これらの支援がないウクライナ避難民以外の強制移住で来日した人たちは、日本での生活基盤をつくるのにどれだけの年月がかかることでしょう。在留資格すら得ることができない人は就労の機会も奪われ、国民健康保険への加入ができないため医療へのアクセスも保証されません。ウクライナ避難民の受入れの経験から作られた支援を、政府の枠は難しいとしても、少なくとも市民がつくり出したウクライナ避難民への支援の仕組みを、早く他の難民の人たちへの支援に広げるべきだと考えます。

11月にカナダ大使館で開催（在日カナダ大使館、日本国際基督教大学財団、パスウェイズ・ジャパンの共催）された「難民のための技能に基づくパスウェイズ 長期的な社会統合にむけた課題と解決」に参加をしました。大学進学や就労可能な技能を持つ難民の受け入れの道筋（パスウェイズ）の可能性、語学学習を含む就職と支援、安定した法的地位への道筋、社会的な社会統合のために必要とされていることについて、政府、国際機関、企業、NGO、難民当事者等、様々な関係者が経験を共有し、話し合いました。また、ウクライナ、アフガニスタン、ミャンマー、シリア出身の難民の若者たちは、語学教育の充実、メンタルヘルスのサポート、ニーズに合わせた雇用プログラム等の必要性が強調されました。

私は、この数年間、ウクライナ避難民をはじめとする難民の就労支援を積極的に進めていますが、難民・避難民と外国人の就労の課題は共通点が多いと考えます。課題の1つは、雇用する組織の考え方です。組織に人が合わせるのではなく、その人が持つスキルや経験、人柄を活かした就労ができるように組織が柔軟に対応しなければ、安定した雇用の実現はありません。2024年4月1日から事業者による障害がある人への合理的配慮の提供が義務化されました。外国人は障害者ではありませんが、合理的配慮の具体例として厚労省が示している「意思疎通への配慮」「ルール・慣行の柔軟な変更」は外国人にも共通します。そこには、事業者と被雇用者とが対話を重ねともに解決策を検討していくことが重要であると書かれています。また、2019年に施行された「日本語教育推進法」には、「事業主の責務」として「第6条 外国人等を雇用する事業主は、基本理念にのっとり、国又は地方公共団体が実施する日本語教育の推進に関する施策に協力するとともに、その雇用する外国人等及びその家族に対する日本語学習の機会の提供その他の日本語学習に関する支援に努めるものとする。」と定められています。

事業者だけでなく、私たち市民も「合理的配慮」や「日本語教育推進法」で定められていることを認識し、ウクライナ避難民の受け入れ経験で得た学びや気づき、つくられた仕組みを職場や社会で広げ、新たな排除を生み出すことのないよう、私たち一人ひとりが意識をして、対話を重ねていく必要があると思います。

（かんだ すみれ）

情報クリップ

co-opnavi 2024.12 No.871

サステナブルな社会づくりに貢献する生協の取り組み

日本生活協同組合連合会 2024年12月 A4判 32頁 363円（消費税込）

<私たちの「この一枚」> コープかがわ
組合員、取引先と共に開発した「冷凍さぬきうどん」
つながりづくり部 部長 細川朝香

特集

サステナブルな社会づくりに貢献する生協の取り組み

<今日も笑顔のコープさん> コープおおいた

<想いをかたちに コープ商品>

CO・OP大きなご馳走えびフライ

<生協大好きママコープ山さんの 教えて！CO・OP商品>

CO・OPやわらか豚角煮トンポーロー

<CO・OPの役立ち♪家庭用品>

CO・OP流せるトイレクリーナー

<組合員に支持される 店づくり・売場づくり>
いわて生協

<日本全国 宅配現場におじゃまします>

コープデリにいがた

<松丸 燐先生の食育エッセイ> 進め栄養！

<生協のDE&I 多様性のある職場をつくろう>

京都生協・株式会社ハートコープきょうと

<この人に聴きたい>

毎日放送アナウンサー

清水麻柳さん

<ほっと navi> コープこうべ／茨城県生協連

生活協同組合研究 2024.12 VOL.587

コロナ禍を経て明らかになつた地域の実情

公益財団法人 生協総合研究所 2024年12月 B5判 64頁 定価550円（消費税込）

巻頭言

相続税を未来のために

麻生 幸

特集

コロナ禍を経て明らかになつた地域の実情

コロナ特例貸付からみえた暮らしを支える仕組みの脆弱性

—地域と制度の課題—

角崎洋平

民生委員・児童委員の「担い手不足」

—制度の継承と発展への道筋—

小松理佐子

ひきこもり伴走型支援

「山根モデル」から「宇部モデル」へ

山根俊恵

民間事業者等の活用による生活支援サービス拡充のあり方

を考える 一厚生労働省令和5年度老健事業調査研究事業

報告を中心一

山際 淳

コラム 自分たちの目指す理想の看多機を作る

～医療生協さいたまケアセンターかがやき～

内田由美子・伊東希実枝

時事評論

日本被団協ノーベル平和賞受賞に思う 一生協もともに進めた被爆の記憶・証言と核兵器廃絶の訴え 斎藤嘉樟

■国際協同組合運動史（第33回）

1954年第19回パリICA大会—日本からの参加者2人と原水爆禁止を含む平和決議の提案も— 鈴木 岳

■本誌特集を読んで（2024・10） 北濱利弘・久保ゆりえ

■新刊紹介

向田映子『私たちは市民金融を作った』 三浦一浩

●公開研究会

「2024年度全国生協組合員意識調査概要報告」（12／12）

●生協総研賞第15回表彰事業候補作品推薦のお願い

●生協総研賞第15回表彰事業実施要領（抄）

文化連情報 2024.12 No.561

農の行く末に思いをはせ

日本文化厚生農業協同組合連合会 2024年12月 B5判 72頁 文化連情報編集部 03-3370-2529*注

農協組合長インタビュー（101）秋田ふるさと農協

チャレンジする組合員を尊重し応援 佐藤誠一

「103万円の壁」と社会保険の負担問題を考える

東 公敏

第30回JA全国大会を開催

食と農、地域を支える協同の実践スタート

院長インタビュー（353）平鹿総合病院

人口減に立ち向かい、地域の中核病院の将来像探る

堀口 聰

自著を語る

協同の系譜 農の未来を拓いたリーダーたち

夏川周介

医療スタッフのリスクリギングの必要性と課題

—第73回日本農村医学会学術総会

文化連ランチョンセミナー

協同精神のリレー (21) 新たな出会いと協同

伊藤澄一

二木教授の医療時評 (226)

医療・社会保障の選挙公約での与党と一部野党の「逆転現象」

二木 立

日本文化厚生連 第77回常勤役員・参事会議

第13回厚生連購買担当常勤役員・参事会議開催

<新連載>食べ物から考える<共(コモン)>の仕組み (1)

お金儲けしない(非営利)経済学とは? 平賀 緑

第47回臨床工学部会および第7回医療機器安全管理部局会議を佐野厚生総合病院で開催

日本臨床工学技士会 肥田泰幸副理事長と厚生連医療材料全国共同購入委員会臨床工学部役員がWEB懇談会を開催

「医工連携」が拓く医療技術イノベーション (5)

物事を分類するには、形態と機能に注目するのも一つの方法

梅津光生

梅津光生先生が「日本鉄道賞」を受賞されました

野の風 霞ヶ浦編

農業者・生活者として語る (12) 最終回

農の行く末に思いをはせ

山口和弘

変わる日本のまちづくり (52) 最終回

障がい者の自立支援と地域生活の問題解決へ

—社会福祉法人ホープの取り組み

杉岡直人・畠山明子

多様な福祉レジームと海外人材 (78)

新しい人材フロンティアとしてのロンボク島

:金のかからない送り出しはできるのか 安里和晃

デンマーク&世界の地域居住 (185)

「働くことを通した社会参加」に総合的に挑む

社会福祉法人 宮共生会(長崎県佐世保市)

松岡洋子

□書籍紹介

にぎやかな過疎を作る 農村再生の政策構想

▶線路は続く (191)

いにしえの都を巡る JR奈良線

西出健史

にじ 2024年 秋号 No.689

組合員組織の活性化方策を考える

一般社団法人日本協同組合連携機構 2024年 B5判 68頁 1100円 (税込)

オピニオン

○組合員組織の活性化方策を考える

—組合員はその希望と夢のために戦う—

山下富徳(日本協同組合連携機構 常務理事)

特集企画

組合員組織の活性化方策を考える

○協同組合における組合員組織の意義と展望 西井賢悟

(日本協同組合連携機構 主席研究員)

○JAの基礎組織の現段階と課題 小林 元

(日本協同組合連携機構 常務理事)

○生協における多様な組織づくりの意義と課題

—パルシステム東京の実践から—

阿高あや

(日本協同組合連携機構 主任研究員)

○生協組合員組織の機能と見直し方向

—コープさっぽろの「組合員活動カイゼンプロジェクト」

および接点づくりからの検討—

岩崎真之介

(日本協同組合連携機構 主任研究員)

○JA女性組織の活性化を考える

—JAとJA女性部の支援による

フレミンググループの新たな展開— 小川理恵

(日本協同組合連携機構 基礎研究部長 主席研究員)

○リーダーシップ開発から考える

JAグループ役員教育の課題

藤井晶啓

(全国農業協同組合中央会)

教育部教育企画課 主席研究員)

○ヨーロッパの女性農業者の現状 和泉真理

(日本協同組合連携機構 客員研究員)

編集後記 西井賢悟

(日本協同組合連携機構 主席研究員)

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(✿)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

書籍紹介

子どもの学習支援
ハンドブック

地域に学びの居場所をつくる

地域における子どもの学びの支援共同研究会(著)
南出吉祥・大村 恵・橋本吉広(編)学習権を保障する多様な実践から見えてくる
子どもの学習支援のこれまでとこれから
子どもたちとつくる“学びを通した居場所”とは

かもがわ出版

伊藤 小友美 会員からの書籍紹介

子どもの学習支援 ハンドブック 編集:南出吉祥、大村恵、橋本吉広

出版社:かもがわ出版 出版日:2024年7月 価格:2200円(消費税込)

伊藤 小友美 会員ご紹介

内容紹介

「学習支援」とは何か、(学習支援活動の展開／「学習支援」をめぐる論点／学習支援における「学習」の意味／学習権を保障する学習支援へ)／第2部 子どもの育ちと学習支援(地域につながる学習支援—寺子屋学習塾・平安通教室／小学生の学習支援—わいわい学びの“ひろば”ほか)／第3部 学習支援の多様な展開(小さな団体同士のネットワークで支える／高校生・青年期の若者が学習支援によって得るもの／大学での学習支援とはどういうものか／「自主夜間中学」という名の学習支援)／第4部 子どものための学習支援の未来—教えるとは、希望を語ること—(子どもの貧困対策としての学習支援／学習支援の運営精神—子どもの権利の全面的保障を目指して ほか)／<資料>名古屋市における学習支援事業等の概要など

地域における子どもの学びの支援共同研究会は、当地域と協同の研究センター研究員の橋本吉広氏が事務局を務めています。9月には、第4回子どもの学習支援研究集会が開催され、私も参加しました。そこで本書の紹介もあり、名古屋市立大学大学院人間文化研究科／人文社会学部の松村智史先生から次のお話があったので紹介させていただきます。

本書は、学習支援に関する体系的な書籍や報告が少ないなか、制度的・歴史的な意義・変遷を俯瞰的に整理(第1部)、学習支援の多様で豊潤な現場・実践を照らす(第2部)貴重なものである。具体的には、学習支援を共通のキーワードにしつつ、

- ・学習支援自体が持つ多様性・豊潤さ・固有性
- ・団体同士や行政等との連携によって広がる可能性
- ・不利や排除されがちな子ども・人々の権利保障のあり方
- ・活動に取り組む中で感じる葛藤、課題、社会への問い合わせ

について多面向的、かつ、説得力をもって描き出すことに成功している。執筆者たちが、実際に、日々現場で多様な取組を実践し、様々な葛藤を経験しているからこそその賜物ではないか。

松村先生は『子どもの貧困対策としての学習支援によるケアとレジリエンス～理論・政策・実証分析から』(明石書店、2020年)を著しておられる学習支援研究の第一人者です。

地域における子どもの学びの場の大切さを実感できる本書を、研究センター会員のみなさまにおすすめします。子ども達の学びたい気持ちを育み、支援できる地域づくりがすすむことを願いつつ。

研究センター1月活動の計画

- 10日(金) あいち在宅懇話人会・新春情報交換会
11日(土) 菱野団地自治会多文化共生ミーティング
14日(火) 尾張地域懇談会
15日(水) 三河地域懇談会懇話人会
16日(木) くらしと平和・憲法を守る実行委員会
18日(土) 友愛協同セミナー
20日(月) 三重大学「協同組合論」講師派遣
21日(火) 社会的養護が必要な若者支援学習会
23日(木) 第7回協同の未来塾
24日(金) JCA 都道府県役員会議
25日(土) アジアボランティアネットワーク東海懇話人会・第6回生協職員マイスター講師派遣
26日(日) サードセクター研究会(経済学・経営学部会)
27日(月) 地域における子どもの学びの支援共同研究会
29日(水) 常任理事会
30日(木) 第3回組合員理事セミナー
31日(金) 愛知県主催「災害ケースマネジメント研修会」

※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止等のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センター
ホームページ
下記QRコードでご覧ください。
ホームページQRコード



地域と協同の研究センター
Facebook
下記QRコードでご覧ください。
FacebookQRコード

